

ブラジルにおける

「日本人の村」調査からの音信

前山 ジャンジーラ

Jandyra Maeyama
(旧姓 藤村)

(註) 村研年報第四集「ブラジルにおける日系村落社会の構造とその展開過程」(伊良湖幹での村研大会の報告をまとめた)の執筆者。東京教育大修士卒後、コーネル大の人類学科博士課程在学前山隆氏と結婚。一九七一年、現地調査のため母国(ブラジル)へ行き夫君の調査に協力中。以下中野卓会員あて私信より抄出。

(前略) この九月で、ブラジルに着いてから一年目を迎えます。月日のたつのは早いものです。海外(註、日本と北米)にあまり長く住みすぎたためか、最初の(註、南米への)なつかしさが、うれしさが過ぎると、今度は、ブラジル人のだらしなさ、電話・郵便・交通機関の不便さなどに憤慨し、逆に日本やイサカ(註、Ithaca コーネル大所在地)などが懐しくなったり、いろいろ“cultural shock”もありましたが、今はすっかり road trip して元気にやっています。主人の調査は上々。すっかり、ブラジルの生活のリズムに乗せられ、サンパウロ市日本人街の飲屋で・悪友達・とチョイトいっばいやったり、サンカルロス日本人会の演芸会に当地の一世と二世問題をあつかった自作の芝居、トマトとコンピューター、な

るものを上演したり、かんじんの調査の方はあまりはかどりませんが、前山は「人類学者が現地調査の中で芝居を書くことの意義」とか何とか云って、けっこうたのしくやっています。サンカルロス地方は有名な古コーヒー Fazenda 地帯で、一九二九〜三〇年の経済恐慌でコーヒーファゼンダ(Coffee fazenda)が没落した後も大土地は分割されずに現在に至り、昔のコーヒーファゼンダは牧場か砂糖キビ園に変わっています。ファゼンダ形態をそのまま引継いでいますので、しながって、無にひとしく、Fazendinho が借地農(ファゼンダの一部を借りて農業耕作をしている)、それとも sítio-proprietário 主はコーヒーベックと共に没落し、現在の牧場主、砂糖キビ園主などは多くはサンパウロ市あたりの資本家達です。一方、サンカルロス市は人口八万ぐらい、現在工業都市として発展しつつありますが、そのほとんどが、サンパウロ近郊の工業園から進出してきた大企業の分工場で、地元企業は少数です。コーヒー不況によってコーヒーの資本が都市産業へと流れていき、その地方の工業化発展をりながしたというプロセスは見られず、その点、他のサンパウロ州の地域と異なる面白い所だと思えます。この地方には、一九世紀の終りから、主にドイツ・イタリーなどの移民が導入され、日系移民もだいぶ入ったようですが、コロノから借地農、ファゼンダの分割による小土地所有、自作農といった経路をたどることがむずかしかったので、日系移民の大多数が、他の地域へ流れていった模様です。ドイツ移民・イタリー移民がどのような経路をたどったか、又、こ

これらの移民とサンカルロスの都市化とのかわり、他方、小土地所有、自作農民がほとんど存在せず、ファセンティロと借地農、ファゼンティロとsharlocopersと、大きく二つに分解された。農村社会におけるコミュニティとは何か、私にとっては興味深い問題です。前山は全々別の観点から調査を進めています。残念ながら実際には、のんびりと道草ばかりくっている仕末です。目下、ブラジル文学、とくに農村と農民問題を扱った小説などに熱中しています。コーヒ―前線と平行して進められる鉄道の設置につれて、土地のValorias、fator、未開地の所有、その影響などなど、四角張った社会学の教科書よりも、小説の方が面白いです。Coronelismoは、ブラジルの農村社会を勉強するには重要な問題だと思えます。ただ、余りにも興味が多すぎて、何を本当にやっていいのか決心がつかね、かんじんの、日本のむら、が、だんだん遠くなりつつあります。・むら、を見失わないうちに、もう一度日本の農村も歩いてみたいものです。